

在外研修報告

1978年8月19日より2ヶ月間にわたり、文部省の在外研修で西ドイツを中心にヨーロッパ7ヶ国を訪問することができた。研修題目は「北欧における青銅器文化の比較研究」という内容で多くの博物館等を訪れる機会をもった。

森と湖が続く美しい光景を機上から眺めながら最初の訪問地ストックホルムに到着した。歴史博物館では常設展示にくわえて、バイキング展が開かれており、ヘッドフォンによる日本語での解説まで用意してあるのに驚いた。常設展示ではかねて坪井所長からそのディスプレイの良さを聞き、写真も見せてもらっていたが、実見してそのすばらしさに改めて感心した。

西独では30日余滞在した。今回の最初の公式訪問地であるベルリンの考古学研究所へ行くまでの数日は、ハノブルグを基地にして北ドイツの多くの博物館を回り、沢山の青銅器ほかに接した。Dr. W. チンマーマンに、2日間にわたって若い女性3人とともにエルベ河口に近いフルゴン地域の遺跡案内もしてもらった。紀元後1～5世紀の集落の発掘現場や、メガリスの見学、そしてまた夜遅くまでスライドで遺跡解説をしてもらい、皆で発掘小屋(レンガ作りの農家)で泊った経験は、その後のドイツでの遺跡見学のイントロとしても大変勉強になった。

ドイツ考古学研究所ベルリン本部では、そこから歩いて約5分、一戸建ちで美しい花の咲いた広い庭のあるゲストハウスで5泊お世話になった。カイロからの研究生も1人泊っていた。研究所は午前8時30分始まりで、その頃にはもう掃除もできていた。皆出勤していたようだ。(金曜日午後から日曜日まで休み、フランクフルトも同じ)書庫はガラス張りの明るい建物で、窓際にいくつもの机が並んであり、学生や主婦風の数人が本を読んでいた。日本の本は10冊にも満たない。ダーレムにある国立博物館には2日通った。民族部門を案内して下さったDr.ティーレは、その春奈良博の展覧会へ仏像をもってこられた方で、「はり新」の宿をなつかしんでおられた。東ベルリンのペルガモン博物館の陳列の荘大さにはアッと驚かされた。その夕5時に博物館を出て駅へ向う途中、オペラ劇場の前を通り当夜のプログラムを見たところが、ドン・ジヨバンニが7時から始まるではないか! 期せずして本場のオペラを味うことが出来た。

フランクフルトの研究所ではDr. F. シューベルトに奈文研以来再会することができた。ここでも研究所内にあるゲストハウスを利用させてもらった。研究所では表玄関と書庫の鍵をいただき、時間外でも入れるよう配慮してくださったことは思いもよらないことだった。夜中でも本を見に行けますよ! と。ここに拠点をおき、ケルン、ポン、マイント等の遺跡や博物館を見て回った。ライン下りは、パン・ベートーベン号の車窓よりその船を見ることですませた。朝6時、すべての荷物をかかえ列車でミュンヘンへ向った。途中、インゴルシュタットで下車し、シューベルトさんと落ち合ってマンチンのオッピダムを案内してもらった。ミュンヘンの研究所は金石文研究を主としており人数も少ない。ビルの3・4階を占めている。またもや4階にあるゲストハウスに投宿した。シューベルトさんにはお礼の申しようもない。(工楽普通)